

素晴らしき 伝統工芸

越前和紙

最高級の和紙が室内を華やかに、そして心地良くしてくれる。

紙祖神・川上御前が、約1500年前に村の人々に紙漉き技術を伝授したという伝説が残る『越前和紙』。それ以来、現在まで技術は伝承され、和紙の一大産地として名を馳せています。

近年の和紙は文具や小物などの素材として使われることも多いです。加えて和紙はサイズも幅広

く、さまざまなものに対応可能な万能素材です。

例えばふすま紙。越前和紙は手漉きの繊細さとなめらかさ、そして数々の模様があることから、ふすま紙として優れています。和紙は植物を原料にしているので、和紙自体が空気を通し、室内の温度調節もできるという環境に優しい

素材なのです。自然の風がうまく流れない部屋でも、和紙を使ったふすま紙には室内を快適にしてくれる効果も期待できるのです。

さらに最高級の技で漉かれた越前和紙を用いることで、室内の雰囲気華やかに演出するアクセントにもなるでしょう。

明治時代には お札にもなっていた 最高級の品質

東京では江戸唐紙に、京都では京唐紙になるなど、越前和紙は素材の和紙としても有名です。それらの和紙が身近な雑貨などに形を変えていくのです。また、明治時代には「太政官金札用紙（お札）」に使われたこともあるなど、越前和紙は当時から全国的にも最高級の品質を誇っていました。



越前焼

日本六古窯の一つに数えられる、
自然釉が生み出す模様が魅力的な焼物。

粘土の質が可能にした 高温での焼成と、 伝統的技法が息づく

越前焼に使われる土には、鉄分が多く、耐火性もあるので、高温で焼く「焼き締め」と、薪の灰が液体になって器に流れ出す自然釉が特徴です。越前焼には、陶工自身が作品を中心に回りながら、太いひも状にした粘土を積み上げていく「ねじたたて成形」という伝統的な技法も残されています。

現在は約80の窯元が窯を構え、独自のものづくりに励んでいます。思い付くままに好きなものを選んでみたり、あるいは気に入った作家の作品を集めてみる面白いです。

日本六古窯の一つ『越前焼』は、850年前より続き、今では世界遺産にも認定されています。越前の土は鉄分、粘土分を多く含むため焼締まりが強く、多彩な焼き上がりの肌合いが特徴です。このような土から江戸時代までは甕、壺、すり鉢を作り、人々の暮らしを支えてきました。現在では土の強度を高め、繊細な成型も可能になり、暮らしに寄り添う器が陶芸家たちによって日々制作されています。



越前漆器

1500年もの歴史を刻む、
優雅さを備えた器の世界。

さまざまな工程の 職人の手を経て 最高級品となる

漆器生産では素材となる木材の選定・加工に始まり、下塗り、上塗り、蒔絵、沈金など、さまざまな工程を分業して行っています。それぞれに専門の職人が腕を競いつつも、他の工程の職人を気遣いながら作業を行うからこそ、でき上がった漆器は最高級のものとなるのです。

『越前漆器』は、約1500年もの歴史があり、優雅な塗り物として有名です。漆黒や朱色の艶やかな塗りと蒔絵や沈金など、日々の生活に美と高級感をもたらしてくれます。

漆器と聞くと、取り扱いが難しく、年に数回使うだけという人も多いのではないのでしょうか。しかし漆器は毎日使える丈夫な器。使いやすさは抜群で、塗り直せるのも特徴です。お碗の他に皿、鉢、杯、装飾品など、種類も豊富です。さらに漆も日々進化し、今では食器洗浄機や乾燥機で利用できるものも登場しました。食事にお酒の席に、時には空間演出に、漆塗り製品を置いてはいかがでしょうか。



越前箆笥

ほぞ接ぎ技術を今に伝える、
高質で艶やか、風格漂う箆笥。

旧・武生市内にある 産業の中心地 「タンス町」

旧・武生市（現在の越前市）は丹南地区の中心地であり、産業や商業が発達してきた地域です。まちなかには「タンス町」と呼ばれる界隈があり、箆笥屋が軒を並べています。職人たちが越前箆笥やさまざまな木工品を製作している風景を見ることができるので、散策にもおすすめです。

越前市で江戸時代後期より製造されている「越前箆笥^{たんす}」。釘を使わずに組み立てる「ほぞ接ぎ^{つぎ}」の指物技術のほか、鉄製金具や漆塗りなど、他にはない技巧を凝らした品で、2013年に福井県では越前焼以来7つ目となる、国の伝統工芸品に指定されました。

この地域での木工の始まりは江戸末期から明治初期にかけてとされています。工芸的な仕事をしてきた人や手先が器用な人たちがお膳風呂や板戸などを作り、これらの製作を専門化させていきました。その後、指物師として旦那衆の家や寺社の仕事を手がけるようになり、高価な箆笥や建具を製作してきたその技術が、今に受け継がれているのです。



越前打刃物

協力／株式会社 龍泉刃物

最高の技で鍛えられた包丁から始まる、
楽しく、美しい料理の世界。

食材に合わせて 数種類の包丁を 揃えてみては

毎日の生活で刃物は欠かせません。三徳包丁、ベティナイフ、出刃包丁など、それぞれの素材に適した厚みや研ぎを施しているので切れ味は抜群。1丁だけを使っていると包丁の傷みが早くなるので、定期的にプロに研ぎ直してもらうことも包丁を長持ちさせる秘訣です。

約700年前の南北朝時代、京都の刀匠だった千代鶴国安が刀剣作りに適した地を求めて府中（現・越前市）にたどり着き、近郷の鍛冶職人に鎌の製造方法を教えたことが「越前打刃物」の始まりとされています。

全国に数ある刃物産地の中でも、越前打刃物は素材となる鋼を約800℃もの火で熱して叩く、日本古来の鍛造技術を生かした刃物作りが続けています。この伝統を生かして作られた包丁は長持ちし、切れ味も良くなります。切れ味が良いと素材の味を損なわないことから、世界のトップシェフも越前打刃物を愛用。高品質の打刃物を使えば、料理が美しく充実したものになるでしょう。



若狭めのう細工

自然が生み出した美しい色の競演。
太古より続く貴石細工の真髄。

独特の焼き入れが 生む炎のごとき 艶やかな赤

めのうの原石から9つもの工程を経て生まれる若狭めのう細工。中でも特徴的な工程が「焼き入れ」です。灰の中に原石を置き、炭で焼く作業を繰り返すことで、独特の艶やかで深みのある赤が出てきます。温度の加減で割れや透明度が左右されるため、職人の腕が試される工程です。

現在の技術を受け継ぐ職人は一人ですが、調度品だけでなく、工程の中で出る石のかけらを活かしたピアスやイヤリング等、時代に合った商品づくりに積極的に取り組んでいます。

江戸時代に高山喜兵衛なる人物が、浪速の眼鏡屋奉公中に習得した技をもとに玉造りを始め、明治初期には中川清助により、動物などを象った彫刻品としても発展します。国内外の美術博覧会で展示されるようになり、昭和51年には国の伝統工芸品に指定されました。

めのう細工は日本の貴石細工のルーツとも言われ、奈良時代に鰐族という渡来人が若狭の神社の前で玉を作ることを仕事としたのが起源とされています。

江戸時代に高山喜兵衛なる人物が、浪速の眼鏡屋奉公中に習得した技をもとに玉造りを始め、明治初期には中川清助により、動物などを象った彫刻品としても発展します。国内外の美術博覧会で展示されるようになり、昭和51年には国の伝統工芸品に指定されました。



若狭塗

若狭の海をイメージした塗物は、
料理を美味く見せる“宝石”のよう。

何重にも塗り重ね、 慎重に研ぎ出すから、 最高の塗物になる

飾りを付けて色を重ね、その後、研いで模様を出す「研ぎ出し」は、若狭塗独特の手法です。研ぎ石も数種類あり、少しずつ慎重に模様を出していきます。完成までに60以上の工程を要する若狭塗。塗り筆は全国シェアの実に80%以上を占めているほどの生産量を誇っています。

江戸時代に小浜藩主・酒井忠勝公が奨励。丈夫な木地の上に、先代から受け継いだ模様を飾り、色を塗り重ね、石で研いで模様を出す伝統的な技法が今も行われています。模様の元となるのは、貝類や卵の殻、松葉など。意外と身近なものばかりというのも特徴と言えるでしょう。

漆黒の上に光る装飾は、盛り付けた料理を美味く見せるだけでなく、その場に会する人との会話も賑やかにしてくれます。

若狭の海底をイメージしたものとされ、かつては「宝石塗」とも呼ばれていた「若狭塗」。赤・緑・黄色の色漆や金箔により、艶やかな色彩と美しい輝きを生み出しています。



めがね

世界に誇る“ものづくり”への情熱、
未だ冷めやらず。

工程は最大200。 めがね職人の街に 移住する人も多い

めがねの生産工程は多いもので200以上。一つの会社では完結せず、一つひとつを専門の職人が完成させていくため、鯖江市は街全体が職人の街となっています。さらに、チタンフレームをはじめ革新的な技術と開発力を持つなど、めがね業界の“聖地”で、職人を希望する県外からの移住者も多いです。

めがね枠の国内製造シェアは9割以上、世界に比肩する一大産業として圧倒的な品質を誇ります。生産が始まったのが1905年のこと。農閑期に新しい産業を取り入れたのがきっかけでした。200以上にも及ぶ生産工程は、勤勉で我慢強い県民の性格にも合致したことから、さばえ産地は一大産地として広がっていきました。

先人たちが努力を重ね、磨き上げてきた繊細で高度な技術は、決して真似ができるものではありません。技術大国・日本の核である“ものづくり”に対する情熱の炎は、福井の人の中に燃え続け、今日も新しい技術革新に邁進しています。



繊維

産業が近代化してから約150年。
常に発展し続ける「繊維王国ふくい」。

繊維生産における 各工程が詰まった 産出県としての誇り

福井県は多種多様な繊維を製造できる、全国でも希少な総合産地です。さらに糸から生地にするまでの工程も集積しており、その技術力や開発力、そして品質は世界でもトップクラス。異業種への展開も可能で、繊維の可能性が広がっています。

古代から繊維の産地だった福井。産業が近代化するきっかけは、岩倉使節団に随行した由利公正が、明治6年にイタリアから持ち帰った絹織物でした。これが後に「羽二重」と呼ばれる絹織物の輸出で、日本の経済をけん引するまでに成長します。

第一次世界大戦後、生産の主力が人造絹糸（人絹）になると、福井に世界初の人絹取引所が開設。昭和初期には全国生産の過半を占めました。第二次世界大戦後には合成繊維へと素材が変わり、現在に至るまでポリエステル、ナイロン、アセテートなどの繊維が全国生産の第一位に。世界最大級の合成・化学繊維のテキスタイル産地となっています。

古代から繊維の産地だった福井。産業が近代化するきっかけは、岩倉使節団に随行した由利公正が、明治6年にイタリアから持ち帰った絹織物でした。これが後に「羽二重」と呼ばれる絹織物の輸出で、日本の経済をけん引するまでに成長します。

第一次世界大戦後、生産の主力が人造絹糸（人絹）になると、福井に世界初の人絹取引所が開設。昭和初期には全国生産の過半を占めました。第二次世界大戦後には合成繊維へと素材が変わり、現在に至るまでポリエステル、ナイロン、アセテートなどの繊維が全国生産の第一位に。世界最大級の合成・化学繊維のテキスタイル産地となっています。